

あすかホールディングス株式会社取締役会長 谷家衛氏

新公益連盟幹事 宮城治男氏（特定非営利活動法人 ETIC. 代表理事）

Global Social Impact Investment Steering Group (GSG) 国内諮問委員会委員 鶴尾雅隆氏

（特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会 代表理事）

モデレーター：一般財団法人社会的投資推進財団代表理事 青柳光昌



※左から青柳光昌、鶴尾雅隆氏、宮城治男氏、谷家衛氏

初日午後2つ目のパネル・ディスカッションでは、投資家の谷家氏、新公益連盟幹事の宮城氏、日本ファンドレイジング協会代表理事の鶴尾氏が登壇し、社会的投資推進財団代表理事の青柳氏のモデレートの下、日本における社会的インパクト投資のエコシステムについて語られた。谷家氏はいわゆるヘッジファンドをやってきたが、資本主義は行き過ぎたという問題意識があり、アイザックの立ち上げ、ヒューマンライツウォッチの支援、マインドフルネスの会社設立などの活動をしている。宮城氏は90年代後半から起業家支援を実施。現在、優秀な学生の多くがソーシャルセクターを目指すなど企業もインパクト投資を無視できない現状があると指摘した。鶴尾氏は社会問題とお金の問題を扱い、休眠預金や遺贈寄付のネットワーク、G8 国内諮問委員会の副委員長を務めている。

社会的インパクト投資のエコシステム

現在のセクターにおける課題や現場ニーズについては、鶴尾氏よりソーシャルセクターには資金の受け手、出し手、中間支援組織の3プレーヤーがいるが、社会的インパクト投資のエコシステムにおいては評価を行う中間支援組織が重要。しかし、現在の日本社会は行政頼みの意識が強く、評価を嫌いすぎるのが課題との指摘があった。宮城氏は、評価嫌いを含めてソーシャルセクターは側面環境が整わず、頑張っても長く資金が得られる状況になかったとコメント。谷屋氏からは、良い起業家とは個性を発揮し、それを分かりやすく説明して人を動かせる人。商品がユーザに評価され淘汰される普通の企業と違い、NPO やソーシャルはより高次のミッション達成のためもっと一緒に協働しながら大きなインパクトにつなげる必要があるとの話があった。

今後の社会的インパクト投資の推進に向けて

今後、社会的インパクト投資推進のためにはドライバーが必要であり、社会的インパクト投資財団（SIIF）が設立されたことも大きい。次は休眠預金が動き出すことがきわめて重要。休眠預金のお金をテコにして色々なところで評価の文化が馴染んでくるだろうとの指摘があった。また、社会的インパクト投資のエコシステムが動き出すには、お金の出し手も受け手も成熟度がラストワンマイル足りない。NPO など事業者へ融資をしようと

しても待っているだけでは適切な支援先がなく、事業者側が窓口に行っても適切な対応がしてもらえない。このラストワンマイルをカバーできる潜在的ニーズは高まっているとの指摘があった。資金提供者は、マーケットが成立しない01や教育に投資する必要がある、また大企業から資金を集めるだけでなく、クラウドファンディングのようなプラットフォームを使って様々な一般の人が選択できる仕組みが大事であるとのコメントがあった。

以上